

幻想地靈鏡～

Underground Fantasia

枝豆。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある少女、古明地さとりによつて書かれた本によつて過去へと回想される。

突如として現れた悪魔によつて侵略されようとしている地霊殿。さらには紅魔館の吸血鬼が……!?

戦場と化した幻想郷は、どんな感情を生み出すのか。

博麗神社、守矢神社、天界、白玉楼、永遠亭……、そして地霊殿と紅魔館の

命運は!?

さとりと一人の悪魔は、戦場と化した幻想郷で一体どのような物語を築き上げていくのか。

読者様を過去へと誘います・・・。

目次

地霊ノ書

零話「過去へと……」

1

一話「悪魔信仰くフェイスオブデビル

ズ」
4

二話「魔族闘争」
8

三話「初陣」
18

地霊ノ書

零話「過去へと・・・・・・・・」

地霊殿。そこは地上の幻想郷とは一風変わって独特の文化を築いている地底の一角にある屋敷である。この地霊殿には、古明地家の私さとりと妹のこいし、ペットの霊鳥路空と火焰猫燐が住んでいる。事件と言えば空が何かをやらかすぐらいで特に何もなく、比較的平和に暮らしている。

「こうやって、のんびりとお茶をする時間も重要ね」

地霊殿のテラスで私はゆっくりとお茶を嗜んでいた。いつもは忙しいから、こういう風にゆっくりまったりと出来るのは、とても嬉しいことだ。

「お母さん、ただいまー」

あ、もうこんな時間なのね。そうこうしている内に、娘の稔が帰ってきた。

「お帰り、稔。どうだった？お父さんの仕事場は？」

私がそう聞くと、稔は身振り手振りをして、「優しい人がいっぱいいたよ。でも、怖い人達もたくさんいたからびっくりした」と、一生懸命私に説明した。

「そう、それはよかったわ。それで、とても嬉しそうだけどどうしたの？彼氏でも出来た

「？」

「うん、まあ。お父さんの友達の子供で、名前はアレクサンドル・ロマノフっていうらしいよ。何でも人と悪魔との間の子供だから、並大抵の悪魔じゃ太刀打ち出来ないらしいよ」と、稔は嬉しそうに私に言ったので、「そう、それはとても心強そうね。今度会ってみたいわ」と返答した。すると娘は、「うん！」と元氣良く答えた。

私は娘にあることを提案した。それは私の暗黒の歴史、一部を除いて決して人には話したくない過去を娘に告げることだった。それでも聞いてくれるかと告げると、娘は静かに頷いた。

「そう、なら部屋にいらつしやい。稔にはすべてを話すわ」

そう言つて、私は娘を部屋へと招いた。私の部屋は書物や花、肖像画で一杯だったの
で、それを見た娘は一度は見た光景だが、再び見て感嘆の溜息を出さざるを得なかった。
「さて、今から稔が聞くのはあなたの生誕の秘密。そして私とレイ、この地底にいる人達の
忘れてはならない、されど忘れたい過去。それを聞いて、私達を疎まない自信はある
かしら？」

そう聞くと、娘は唾を飲み暫し考えた後、意志を固めたように静かに頷いた。それを
認識すると、私は鍵のかかった机の引き出しから一冊の本を取り出した。

それは私とレイとの出会いや稔の生誕、そして幻想郷の変遷である。せつかくだから

私は本に残していたものを頼りにあの時に物語を語るとしよう。幻想の賢者によって
依頼され、史実に残す為に用意した本を。ーそう、あれはいつも通りの静かな地霊殿で
散歩をしていた時だった・・・・・・・・。

一話 「悪魔信仰くフェイスオブデビルズ」

「今日も一日ご苦労様、お空」

「ありがとうございます！今日の晩御飯はなんだろうなー♪」

お空はとても楽しみに晩御飯は何だと、私に聞いた。

「心配しなくても、今日の晩御飯はハンバーグよ」

「やったー！……ん？」

さっきまでの嬉しさは束の間、お空は何やら空気の異変を感じた。

「どうしたの？お空」

「いえ、何か禍々しい気配が……、さとり様！後ろー！」

「え？」

お空に言われた通り後ろを見ると、何か黒い影が私を襲った。

「何とか回避しないと……！」

そう思って黒い影の心を読むとした。だけど、心を読むとどす黒い心しか読めず、まるで心が引き込まれそうな感じがした。

「悪魔の心は読むものではない。読んだら最期、二度と戻ってこれなくなるぞ」

「!?」

その黒い影から声が聞こえ、影はたちまち人型に変わった。

「あ、あなたは？」

「突然襲ってしまつて申し訳ない。なんせ追われていたのだな。私はレイ・ルシフェル。貴公の名は？」

自称追われていると言っている人、ルシフェルが私の名前を尋ねてきた。

「その前に、後ろで殺気を醸し出している人達を大人しくさせてくれませんか？」

私がそう頼むと、ルシフェルは左手を上げた。すると、影のみだつた人達が人型になつていった。獣みたくないやつや、あの紅魔館のやつのようなやつも潜んでいた。

「……私はこの地霊殿の主の古明地さとりです。隣は霊鳥路空です。……
あら？誰かと思えばそこにいるのは、紅魔館の魔女さんと司書さんじゃないですか。なぜここに？」

「途中で術をかけたらほいほい付いてきた。その小悪魔はかからなかったが、この兵士の慰み者になつてる。ちなみにその魔女は俺の言うことしか聞かない。友人であろうと家族であろうと、私の術が解けない限りその声がかいつの心に届くことはない。もし強引に解いたとしたら、精神操作した際の罫にかかつて記憶を失うことになる。そうなる、私が返すか死ぬか、どっちかなんだよなこれが」

ルシフェルがそう言ったので、もしかしたら、危ない人なのかもしれないと私は警戒をした。

「そんなに警戒をしなくても結構。今から匿ってもらおうと思つてる所を襲うはずがないだろ？何なら心を読め。今はシールドは外してある」

そう言われたので私は恐る恐る読んでみると、確かに嘘偽りはなく、全てが真実だった。

「．．．．．分かつたわ、ここに滞在することを許可するわ。でもただで、というわけにはいかないわ。そうね．．．．．、お空やお隣の手伝いやペットの世話、炊事掃除等の家事をやってもらおうかしら？」

私がそう言うと、奥にいた人達が一齐にざわつき始めて、「何故格上の我々がそのようなことを．．．．．」と言っていた。だがその瞬間、ルシフェルは片手を上げ、「静かにしろ。匿ってもらう身が何をほざいている。私の言葉に反する者は今、目の前に来い」とすごい剣幕で言った。すると、五人前に出てきた。

「ほう．．．．．、我に逆らうか」

「お、お許し下さいルシフェル様．．．．．」

部下に頼まれたものの、ルシフェルは残酷だった。目の前にいた一人をその場で斬つた。

「さあ、次はお前らだ。 覚悟するんだな」

ルシフェルはそう言い、剣を振りかざした。すると何処からともなく紅い紅い槍が飛んできた。

「ルシフェル、あぶなっ……！！」

槍はルシフェルをめがけて飛んでいった。

二話 「魔族闘争」

「ルシフェル、あぶなっ……!」

私はそう叫んだ。だが、心配は杞憂に終わった。ルシフェル目掛けて飛んでいった槍は、ルシフェルによって受け止められていたのだ。

「へえ、こんな私のことを心配してくれるとは。いやはや、嬉しいねえ」

「あ、ありがとうございます。それよりも、追っ手ってまさか……」

暗闇から姿を現したのは、吸血鬼とそのメイド達だった。

「ああ、その通り。紅魔館の吸血鬼共だ。弱いくせに鬱陶しい、いわゆる雑魚だ」

「誰が雑魚だつて?」

ルシフェルの罵倒にその吸血鬼、レミリア・スカーレットは少ししかめた顔で答えた。

「ドラクル、ハルトマン、ケーニヒ……、それに比べてスカーレットは序列じゃ中間層ではないか。全く話にならない。だが、あの時より成長していることは認めてやろう」

ルシフェルがまるで挑発しているような口調でレミリアのことを評価すると、案の定その通りでレミリアは激昂した。

「随分と上から目線じゃない。ただの悪魔ならやり様はいくらでもあるのよ？あなた如きに……」

「お、お嬢様……」

話の最中で、隣にいた従者、十六夜咲夜が割って入ってきた。

「何？咲夜。あなたの小言なら聞きたくないわよ？」

「あの……、失礼を申し上げますが、あまり挑発しない方が……」

「ははは！私が負けるはずが……」

レミリアがぱつと振り向くと、周りの魔族達は戦闘態勢に入っていて、彼はすでに悪なオーラを流していた。そのオーラは、心を読んでいなくても勝手に入ってくるようだった。

「気が変わった。レミリア・スカーレット、貴様を骨身の髓まで服従させてくれるわ！」

そう言つてルシフェルはレミリアに突進していった。

「そんな単純な攻撃じゃ、私は倒せないわよ！“神槍くスピアザグングニル”」

レミリアによつて放たれた槍は、ルシフェル目掛けて飛んでいった。

「これで、奴は死んだだろう……」

レミリアはそう思っていた。だが、その予想は外れた。

「いつから俺が前にいると錯覚していた？」

「なっ……!!?」

彼はレミリアの後ろに立っていた。

「終わりだ。『魔符くヴァニツシングエルス』」

「っ……!!」

彼がレミリアから離れたその時、周りにいた人達が一斉に後ろに下がった。

「な、何でしようかさとり様?」

お空がこの状況に不安になって、私に聞いてきた。

「私にも分からないわ。私はこの人達の心は読めないから何とも言えないけど、危険な気はするわ。現に黒いオーラはあの人から出ているから、出来るだけ離れた方がいいわ」

「分かりましたー」

そうして私達は離れた。すると私達が離れた事を確認した彼は、剣を高々と掲げた。

「この闇の力は光をも飲み込む闇。魔族をも飲み込む闇に貴様は耐えられるか?」

彼がそう言った瞬間、闇が彼を覆い、更に周囲に広がっていった。

「!? 咲夜、全速力で逃げるわよ! この闇はやばい!」

「え、あ、はい!」

レミリアが咲夜との会話が終えると、逃げようとしたら、目の前に彼の姿が現れた。

「言つただらう？逃しはしないと」

悲鳴を上げる暇も与えない素早い剣の振りで、レミリアの首を斬った。

「お嬢様！」

「咲夜……、フランと美鈴と他のメイド達を連れて、出来るだけ遠くに逃げなさい。一刻も早く紅魔館を離れるのよ……」

「終わりだ」

レミリアが話を終えたところで、彼はレミリアを蹴落とし、レミリアは闇の中へと消えた。

「お嬢様あああああ！くっ！おのれえええええ！」

咲夜はレミリアの命令に背き、仲間を引き連れて向かっていった。

「お前らだけは逃がしてやろうと思つたが……、気が変わった。全力でお前らを壊す。全員、武器を構え突き進め！」

彼が周りの仲間にもそう告げると、其の者達は一気に前へ前へと向かっていた。

「十六夜咲夜！お前は今何の為に戦っている！」

「お嬢様の仇討ちだ！」

「その心意気、卑しくも良し！ならば倒してみせろ！その復讐心、我にぶつけてみよ！」
まるで、相手を挑発するような口調で彼は咲夜に言った。私はその時、割つて入るの

は滑稽だと思つたが、案の定、割つて入る必要はなかつたようだ。そう、一撃、たつた一回の振りで咲夜はその場に崩れ去つたのだ。

「口程でもなかつたな。十六夜、致命傷は外してある。今すぐ紅魔館に戻つて、ちゃんと準備してこい。……不公平な戦いは嫌いなものだな」

「……へえ、随分と優しいのね。悪魔のくせに」

「……その辺の悪魔と一緒にするな。私は昔は……、いや、何でもない」
彼は、すぐく意味深長な発言をしようとしたが、あやふやにし、手に持っていた剣を納めた。

「十六夜……いや、咲夜。お前達の出方次第では、レミリアを戻してやらんこともないぞ？ 無論、どうするかはお前達次第だがな」

彼のその提案に、敵は勿論仲間もそれに猛反対した。

「眼前にある敵はうち滅ぼすべきです！」

「目の前にいるのは、お嬢様を殺した張本人ですよ！ ためらうことありません！」

それぞれの仲間の言葉に、二人は「黙れ！」と叱責した。その威圧感のある言葉に、ものを言っていた奴らは肩を竦め黙つた。静かになつたのを確認した咲夜は、再び喋り出した。

「……本当にお嬢様を戻してくれるのですか？」

「ああ、悪魔は嘘をつかないからな」

「……..では、今をもってこれより、あなた様に忠誠を誓います」

「よく言った。よし、レミリアを戻してやろう」

彼はそう言つて、何やら呪文を唱え始めた。暫くして、咲夜の眼に映つたのはいつも慕つていた方の姿だった。

「お嬢様！」

「あら、咲夜。幾分振りね。あなたも死んだのかしら？」

「寝言は寝てから言つてください。ここはれつきとした地霊殿です」

咲夜がレミリアに真実を告げると、きよとんとした瞳で咲夜を見た。

「地霊殿？ 私は死んだはずじゃ？」

「私がルシフェルにお嬢様を生き返らすよう頼みました。紅魔館勢力全員ルシフェルの軍の傘下に入る」という条件ですが」

咲夜は紅魔館の者達にとつてはあまりにもショッキングなことをレミリアに知らせた。案の定、レミリアは狼狽え、回りの物を壊しながら、咲夜に怒鳴り散らした。

「咲夜！ どうして敵に紅魔館を売つた！ 明確が理由がなければ、今ここで」

そう言つて、レミリアはグングニルを取り出し、咲夜の喉元に突き付けた。

「殺すわよ」

咲夜は唾を飲み、喉元を鳴らした。まさに緊張の極地。下手なことを言えば、主であるレミリアのグングニルによつて貫かれるだろう。そのことが分かっていた咲夜は、「申し訳ありません、お嬢様。ですが、お嬢様をお助けするため、紅魔館をお守りするためにこのような過ちを冒しました。貫かれる覚悟は出来ております」と、咲夜は言葉巧みにレミリアを論じた。

「そ、そうなの？なら分かったわ、咲夜がそこまでするならそうなのね。でも、従つたはいいものの、私達はこれからどうすればいいのかしら？」

レミリアは純粹無垢な質問を咲夜に返した。咲夜はたじろいたものの、「彼の方は、黙つて私に従つていればいいんだ。と、仰つていましたわ」と、瀟洒とは名ばかりではない様に、澄んだ顔で冷静に答えた。

「黙つて従えつて……私を誰だと思つていいのかしら？」

「私を雑魚だと豪語しておきながら、呆気なく首を刈られて、おまけにその私に復活させられた憐れな吸血鬼だと思つているが？」

彼が現れ、レミリアにそのことを言い、レミリアはがつくしとした。

「ぐうの音も出ないわ……」

「まあ、そう落ち込むなよ。お前を数ある位の中でも、2番目にいい位を与えようじゃないか」

彼がそう提案すると、レミリアは飛び跳ねて喜んだ。

「私にいい位を与えてくれるのかしら？」

「ああ、身分相当の位を与えよう。『聖帝レミリア』殿？」

彼がレミリアのことを聖帝と呼ぶと、更に舞い上がり、彼女の喜びは有頂天と化した。

「まあ、聖帝と言うぐらいなら服装も変えようじゃないか。そこにいる執事みたいな奴の所に行くといい。彼はここのファクション担当で、ここのあらゆるものを作っている奴だ」

「ええ、分かったわ。ほら、咲夜と妖精メイドの何人か、来なさい。あなた達も衣装替えよ」

レミリアの突然の着替え宣言により、咲夜を含めた紅魔館一同は非常に困惑した。

「わ、私達もですか？少なくとも私は今の服で十分満足しているのですが」

「馬鹿ね、折角色々変えるんだから服装も変えて見栄を張りたいじゃない？旗も作るわよ。それに、もっと大きな城壁を築いて、村も作りたいわね。そう、湖と森の一部を囲うようなね」

レミリアがそう豪語すると、さすがの咲夜もたじろいだ。

「村をですか!?! そうなれば、辺りの妖精達や妖怪を倒さないといけないと思うのですが……」

咲夜がそう心配そうにレミリアに言うのと、レミリアは、「これからよ、心配してくれてありがとうね。でも、心配は不要だわ。何だって、あなたが付いているんですもの」と彼女の心配を振り払うように言った。

「お、お嬢様……」

「というわけで、あなた達に従うわ。早速だけど、命令を聞こうじゃない」

レミリアが彼に命令を促した。わざわざ自分から言わなくも……

「まあ、命令をするよりもまずはパーティーだ。紅魔館のメンバーを集めてこい。親睦会みたいな感じのをやるからさ」

彼は親睦会という名の服従宣言式を行うと皆の前で言った。静観していた私はさすが突っ込んだ。

「会場はここ？ そんなに人数入らないわよ？ 第一紅魔の奴なんて、」「もちろんここだ。まあ、人数は何とかするさ。それと、今から紅魔の奴も家族だ。そんなことをいってはいけないぜ、地底の王女さん」

彼は私の発言に答えた後、頬に軽くキスをした。それをされた時、周りが一斉に歓声をあげていた。……もの凄く恥ずかしい。そうじゃなくても、顔が赤面してるから、きつと私は恥ずかしいのだろう。だけど、ここまでしてくれたのは彼が初めてか。私はいつも恐れられ嫌われ、遂には地底にまで追いやられた。でも、彼は私に優しく、

キスまでしてくれた。．．．．彼とお付き合いがしたい。私はそう思うようになっていった。

「そうね．．．．あなたと言う通りよね。分かったわ、あなたに従う」

「お？急に物分かりが良くなつたな。何か悪いものでも食べたか？」

「食べてる暇なんかないわよ。それと、後で私の部屋まで来て。言いたいことがあるから」

私がそう言うと、「あ、ああ。分かった」と、少し驚いているようだった。

「絶対に忘れないですよ。．．．．真剣な話なんだから」

「分かったよ、絶対に忘れない」

私はそんな風に、彼と悪魔の契約を結んだ。それが追い追い大変なことになるとは、私は知る由もなかった。

三話「初陣」

それから数時間が経ち、他の紅魔館の人達も到着したところで、パーティーが始まった。けれど、他の地上の人達は立ち入り禁止なので、中ぐらいの規模のパーティーになつた。後から来た人達も、渋々ながらも了承してくれて、一心同体の国造りが始められそうだった。

「穏便に事が進んでよかつたわ」

「確かにな。まあ、これからが大変なんだがな」

みんなが寝静まつた頃に、私達二人はこれからの方針を話し合っていた。

「これからどうするの？ 決まつてるの？」

「ああ、先ずは誰を帝に持つてくるかだな。．．．さとりがいいな。靈帝さとり、似合つてるじゃないか」

ええ!? なんて私なの!?! そんな大任任されたら、私壊れちゃうよ．．．

「次に領地分担と違う領地の領主、外交関係と武器を作る所との提携、領地内での建築についてだな。先ずは領地分担と領主について。領地は地図を見たら分かる通り、現在の

領地は旧紅魔館の霧の湖北部と魔法の森東部、この地底一体と妖怪の山山中中央部を領している。ここを地霊帝国として、皇帝をさとり。中央部をお空にする。旧紅魔館を紅魔大公国とし、領地一体を全てレミアアの統治下にする予定だ」

お空を領主にするのは、些か心配なんだけど……。

「次に外交関係。地図を見て、先ずはこの博麗神社を攻めるつもりだ。だから、天界と同盟を結ぶつもりだ。そしてこの太陽の畑と貿易同盟を結ぶつもりなんだが……どうかな？」

「私は地上に出たことがないからよく分からないけど、あの博麗の巫女を攻めるのは些か危険な気がするんだけど。太陽の畑は正直言つて、何も分からないわ」

すると、彼はこんな提案をした。

「何、簡単なことだ。霧雨魔理沙を捕まえ」

急に爆音がした。

「こんな時に……、何事だ！」

彼は怒った。すると、黒焦げになった人が来た。

「報告します！博麗霊夢、霧雨魔理沙、東風谷早苗、魂魄妖夢、鈴仙・優曇華院・イナバがこちらへ前進中！旧都警備隊ももうすぐ全滅！ルシフェル様、ご指示を！」

そう言われると、彼は静かに目を閉じ何か思い付いたように目を開けた。

「空はいるか！」

「は、はい！ここに！」

「うちの小隊3つ預ける。前線であいつらをぶつ倒せ！」

彼のその怒鳴り声で、空は怯えた。

「は、はい！」

「それと、これを持っていけ」

何かが投げられ、空は辛うじて受け止めた。

「こ、これは制御棒と剣？」

「ああ、だがただのものではない。制御棒は空のちよつと改良させてもらった。これで前のやつは何倍もパワーが出るだろう。剣はうちが使つてる標準の剣を改良したものだ。いわゆる将校用だ。さあ、行ってこい！」

そう言われると、空は急に悪い目つきをした。

「目の前のものは全て焼き尽くしてもいいんですよね？」

「構わん、やれ」

「了解しました。では、行ってきます！」

空とその他は旧都へと向かつて行つた。

「さて、俺もそろそろ行くか。さとり、鎧を着つけてくれ」

「ええ、分かったわ」

そう言われて、私は彼に鎧を着させた。

「よし、行ってくる」

「ちよつと待って。これ……」

私はあるマントを彼に着せた。

「ありがとう。じゃあ、行ってくるな」

「行つてらっしゃい」

彼は空の後を追って飛んでいった。

「無事に帰ってきてね、レイ……」